

音楽家にとって なぜ モーツァルトなのか

講師
海老澤 敏

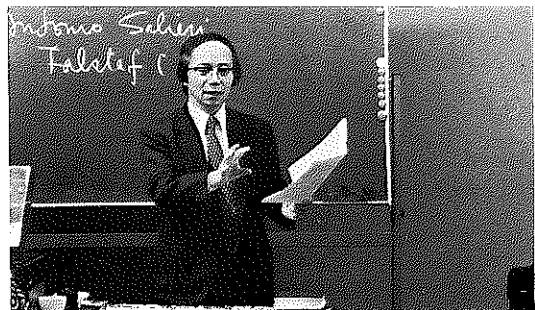
みなさんは、映画『アマデウス』をご覧になりましたか？

アカデミー賞を受賞するなどして話題になり、ヒットした作品ですので、ご覧になった方も数多くいらっしゃると思います。ここでは、モーツァルトとサリエリの対決がかなり大胆な映像で描かれており、ファンタジーの世思を楽しむには、かっこうの作品といえましょう。ただし、あくまでフィクションであり、舞台であるウィーンも、現実のウィーンとははるかにかけ離れ、田舎じみているという批判があるのですが。

モーツァルトといえば、2世紀前の存在です。にもかかわらず、なぜこんなにはやっているのでしょうか。この200年間でざっと振り返ってみましょう。

片サリエリとモーツァルト片

サリエリは『アマデウス』のおかげで注目をあびるまで、ほとんど忘れられていました。死後まもなくヨーロッパ中に浸透していったモーツァルトと対照的です。しかし生前は、宮廷楽長であったことからおわかりのように、サリエリのほうが名声が高かったのです。この2人の作品は、同時上演されたこともありました。



サリエリから見れば、モーツァルトは下品で変な小男でした。しかし、まれにみる天才であることは明らかです。『アマデウス』では、サリエリがモーツァルトを破滅させて神に復讐しようとする姿が描かれています。史実に反してはいるものの、この作品は私達に、モーツァルトとサリエリの対決、また、作曲家の死後の運命というものを考えさせてくれます。

ちょっとここで、サリエリの作品をきいてみましょう。いかがでしょうか。作風はモーツァルトに似ているのですが、何となく物足りないとお感じになるはず。一時はもてはやされたこともあったのですが、200年たってわれわれの心を感動させる音楽ではないのです。しかし、モーツァルトの作品も、全て味わわれていたわけではありません。コンチェルトは、ベートーベンやロマン派の作品に比べて貧弱だということで、忘れられていったジャンルです。教会作品も、レクイエムや八長調ミサ以外は忘れられてしまいました。

月 人間モーツァルト 月

モーツァルトは早くから神童と騒がれていましたが、生前はウィーンを中心としたローカルな作曲家にすぎず、サリエリの方がはるかに有名でした。しかし、19世紀の人々にとってはアポロ的な存在でした。シューマンは、モーツァルトのト短調シンフォニーを評して、「ギリシア風にたゆとうがごとき優美さ」と語っています。一方でモーツァルトは、ドン・ファンの要素も備えていたようです。

月 楽譜の音が違っている 月

さて、ここでモーツァルトのピアノソナタK. 333



を用意しましたのできいてみましょう。

この曲をめぐる『ショパン』誌上で興味深い論争がありました。中田喜直先生が「楽譜の音が違って」と指摘され、それに対し3人の先生が反論を寄せられました。譜例をご覧ください。



この左手は全部半音ですすまないと不自然である。作曲者でない人が校訂の際に間違ってしまったに違いない。中田先生はそう述べられています。

ここで私の見解を申しますと、これは楽譜の間違いで何でもなく、モーツァルトが意識的にやったのだと思われます。自筆譜にもはっきりよみとることができ、理論的にも説明ができるのです。ここで詳しい説明は省きますが、この種のぶつかりあいは不自然ではなく、これこそがモーツァルトの音楽のもつ毒である、といえましょう。

ではなぜモーツァルトがこんなことをしたのでしょうか。モーツァルトは1783年ウィーンでこの作品をかきました。貴族の館で、あるいは多くの弟子の前で演奏したと思われる。彼は意識的に不自然な音を入れることによって、きき手の耳を試したのではないのでしょうか。鋭い人ならすぐおかしいと気付くでしょう。そこでもし間違いを指摘されても、モーツァルトは理論的に説明することができます。あるいは、自分で考えて下さいと答えたかもしれませんね。彼は、おそらく以上のことを直感で考えて、作曲したのでしょう。モーツァルトはそのくらいのこと、平気でできる人間だったのです。彼のどんな作品にも、こういった箇所を発見することができます。

月クレメンティに対抗 月

次にバリエーションK.398をきいてみましょう。



この曲はちょっと変わっています。主題で3度と6度が非常に強調されており、変奏でも常に強調されています。第2変奏と第6変奏は、特に技巧的で、打ち上げ花火のようにきらびやかです。しかし、それだからつまらない、といえるでしょう。



1781年のクリスマスイブ、彼はクレメンティと共にヨーゼフⅡ世に招かれ、弾き比べをしました。モーツァルトはもともと口が悪いのですが、クレメンティに対しては特に手厳しく、父にあてた手紙の中でも、曲のつくり方がくだらない、などと

悪口雑言を浴びせています。クレメンティのほうは、モーツァルトを称賛しているのですが。

このバリエーションは、クレメンティのパロディだと思います。モーツァルトは、クレメンティの演奏をきいて、自分の演奏の限界を見抜きました。これからは、機械的な技巧が主流を占めるようになるだろうことを、直感で感じたのです。彼は、クレメンティを意識して、この曲で3度、6度を駆使しました。「クレメンティにできることは、私にもできる」ということを、ヨーゼフⅡ世に音で語ったのです。



月死をみつめて 月

最後に、ロンドをききましょう。ロンドといえは明るい二長調が有名です。ここではイ短調のロンドをきいてみたいと思います。



なぜ、この曲がロンドでかかれなければならなかったのでしょうか。どうもそこには、音楽理論をこえる理由があるように思われるのです。

この曲は、1787年3月11日にかかれています。その少し前、1月31日には、親友のハツベルト伯爵が世を去りました。4月4日には、お父さんあての最後の手紙が書かれています。お父さんは5月に亡くなったのですが、この手紙で、モーツァルトはお父さんの死を、避けられないものとして、確実にとらえていたことがうかがえます。

この曲には、人間が死ぬということの意味、あるいは、残された親しい人々の悲しみが、こめられていると考えて差し支えないのではないのでしょうか。ロンドというのは、単なる音の形式ではなく、心の想いの形を表しているのです。

親しい人に先立たれた生者の悲しさは、やがて、レクイエムという傑作をうむことになります。音が音を越えて、人間が生と死のはざまになって想う想いが、音になっています。

彼の音楽の痛切な響きから、音の背後にあるものを確実な直感でとらえて弾くこと、これは、モーツァルトの音楽に感動したすべての人々に課せられる使命ではないのでしょうか。



月 200年の時を越えて 月

モーツァルトは200年前に死んだのに、なぜ現代の私達を感動させてくれるのでしょうか。

彼は、根拠のないことはしていません。全て理論的に説明できるのです。サルティが、彼の不協和音を批難したことがありますが、これも、不協和音によって、モーツァルトが、混沌と光明の世界を表現した、とすることができるでしょう。

音楽は、人間がつくりだすものだから、人間の想いを表さないはずがありません。今日、ここで私が申し上げたがったことは、以上のことです。

講義をきいて

モーツァルトといえば、あまりに有名で、いつ、どこにいても耳にすることができる、といってよいほどだと思えます。その旋律があまりに美しいので、つい何となくきき流してしまい、立ち止まって深く掘りさげてみるということ、忘れがちなのではないのでしょうか。

今回の講義では、理論的根拠や史実をふまえ、誰でも知っている曲をとりあげ、わかり易い説明がなされたので、たいへん興味深くきくことができました。

最後に先生がおっしゃった、「音の背後にあるものを確実な直感でとらえて弾くことが、モーツァルトの音楽に感動したすべての人々に課せられる使命である」という言葉を胸に、私自身、勉強を続けたいと思います。
(山田さつき)

——講師略歴

東京大学文学部美術史学科卒業、同大学院人文科学研究科美学美術史学専門課程修了。その後、フランス政府給費留学生としてソルボンヌ大学に留学。帰国後、国立音楽大学教授を経て、現在同大学学長。モーツァルト、ルソーの研究者として、「モーツァルト研究ノート」「ルソーと音楽」「モーツァルトを聴く」「モーツァルトの生涯」「ルソーの夢——むすんでひらいて考——」等、その他多数の研究論文、著訳書がある。昭和57年度サントリー学芸賞昭和59年10月NHK交響楽団第4回有馬賞受賞。同11月、フランス政府パルム・アカデミック・オフィシエ章受賞。